

古代ヘブライ民族の家族道德について

孝 道

楊 能 漸

吾々東洋人は孝行し、且つ孝行されるべく此の世に生れたやうなものである。親に孝行すべきことは當然の道德であり、それは正に善の一つとされてゐるのである。今日は幾分廢れたりといへども孝道は尙ほ最も有力な社會規範の一つたるを失はない。今更、孝道云々するのはあまりに平凡であり、時勢離れの憾がないでもなからう。斯くの如く孝道は吾々の實際生活と密接な關係をもつてゐるが、これがあまりに重ぜられてゐる結果なのか、または西洋の學者が大してこれに興味をもたない結果なのか、孝道論といふのは多くはヤエス・ノー的宣傳文の性質に過ぎず、學術的に孝道を論究したものは、漢人の洒落を拜借して言へば、九牛一毛といった有様である。従つて吾々の如き淺學寡聞の徒輩が斯様な問題の研究を企ても、これに關する一般知識が至つて貧弱なのであるから

ここに試る古代ヘブライ民族の孝道考も幸ひ噴飯の駄辯に始終しなかつたら上々と觀念してゐる。

西洋の宣教師が東洋人の歡心を買ふ爲めに古代ヘブライ人は東洋人の如く親に従順であつたといふことを説教中よく口にするが、これは必ずしも構空的迎合ではなく、事實ヘブライ人は孝道の民であつた。出埃及記中に、「汝の父母を敬へ、是は汝の神エホバの汝にたまふ所の地に汝の生命の長からんためなり」と記され、孝は所謂十誡命中の一つに擧げられてゐる。また、箴言第一章には「汝の父の教をきけ、汝の母の法を棄つるなかれ。これ汝の首の美しき冠となり、汝の項の妝飾とならん」といひ、父母の命令の重きを教へてゐる。舊約聖書に於ては、親を養ひ親に従順なるべきことを、或は歴史物語中、或は律法中の諸處に於て陰に陽に高調してゐるが、その記載の内容は何れも簡單で、論述の發展が見られない。しかし、後世の作たる「ベンシラーの智慧」及びそれ以後の文獻に至つては、その記述が實踐生活に重きを置いてゐる故なのか、或はギリシヤ化による學問の向上の影響なのか、兎も角その孝道論が比較的イデオロギー化されてゐるのを發見するのである。「ベンシラーの智慧」の第三章に、

我兒等よ、汝の父なる我に聽きてこれに従へ、これ汝等救はれんが爲なり。そは主、兒等に感ずる如く父に光榮を與へ、兒等に感ずる如く母の分別を立て給へばなり。その父を敬ふ者は罪の贖を得、母を敬ふは寶を積むが如し。父を敬ふ者はその兒等の喜を得、その禱ることみな聽

かるべし。父に光榮を來す者の日は永く、母に休息を與ふる者は神よりその報を受けん。主を畏るゝ者はその父をも敬ひ、その兩親に奉じて主人に仕ふる如かるべし。我兒よ、言行共に汝の父を敬へ、これ各種の幸福汝に來らんがためなり。父の祝福はその家を建つるも、母の咒詛はその礎を覆す。汝が父の不名譽もて汝自らの光榮をつくる勿れ、それ決して汝の光榮にあらざるなり。凡そ人の光榮はその父の名譽より來り、母の不名譽はその兒の恥辱なり。

我兒よ、寄る年波に於ける汝の父を助け、その生のあらん限り彼を憂へしむ勿れ。彼或はその理解を失ふともこれを忍び、その死に至るまで彼を辱かしむる勿れ。父に對する慰藉は忘れらることなく、罪を消して汝を築き上げべく、惱みの日にこれを記憶せられ、熱の霜を消す如く汝の罪障を滅さん。その父を侮る者は神を瀆すに等しく、その母を怒らす者は主に呪はるべきなり。

親のいふことによく従ひ、親を養ふのが子たるものゝ義務であるが、若し、その義務を破つて親に従順ならず、親に對して盾つくやうなものは處罰されると記されてゐる。これに關聯して創世記第九章にあるノア醜態物語は興味ある問題を含んでゐる。

ノアの子等の方舟より出たる者はセム、ハム、ヤベテなりき。ハムはカナンの父なり。是等はノアの三人の子なり。全地の民は是等より出て蔓延れり。

爰にノア農夫となりて葡萄園を植ることを始しが、葡萄酒を飲て酔ひ天幕の中にありて裸になり。カナンの父ハム、其父のかくし所を見て外にありし二人の兄弟に告たり。セムとヤベテ乃ち衣を取て俱に其肩にかけ後向に歩みゆきて、其父の裸體を覆へり。彼等面を背にして其父の裸體を見ざりき。ノア酒さめて其若き子の己に爲たる事を知れり。是に於て彼言けるはカナンの罪はれよ、彼は僕輩の僕となりて其兄弟に事へん。又いひけるはセムの神エホバは讃べきかな、カナン彼の僕となるべし。神ヤベテを大ならしめたまはん、彼はセムの天幕に居住はん、カナン其僕となるべし。

即ちノアに三子があつたが、その中で、父に對して冷淡なハムが詛はれ、父の爲めに盡瘁したるセムとヤベテ二子は父から有り難き祝福を受けてゐる。當時の人々には親の呪詛祝福は容易ならぬことであつて、それによつて子孫の運命が左右されるものゝ如く思惟されたのであるから、このノアの醜態物語に於るハムに對する呪詛は罰の一種と見て間違ひがないであらう。ヤベテについては明瞭を缺くが、ヘブライ人自ら自分等の祖先はセムに發したものと自認し、ヘブライ人の仇敵であり被征服者であるカナン先住民はハムの子孫であるといふのが、このノアの呪詛祝福の前提をなしてゐることは勿論である。

頑迷なる子にして親の言ふことに從はず、父母を毆罵するが如き不孝ものは死刑に處せられると

う。

人にもし放肆にして背悖る子あり、その父の言にも母の言にも順はず、父母これを責るも聽こ
とをせざる時は、その父母これを執へて、その處の門にいたり、邑の長老等に就き邑の長老た
ちに言ふべし、我らの此子は放肆にして背悖る者我らの言にしたがはざる者放蕩にして酒に耽
る者なりと。然る時は邑の人みな石をもてこれを撃殺すべし。汝かく汝らの中より惡事を除き
去べし。然せばイスラエルみな聞て懼れん。申命記二の一八一―二一

その父あるひは母を撃ものは必ず殺さるべし。……………その父あるひは母を罵る者は殺さるべ
し。出埃及記二の一五―一七

凡てその父またはその母を詛ふ者はかならず誅されるべし。彼その父またはその母を詛ひたれ
ば、その血は自身に歸すべきなり。レビ記二〇の九

尙ほ、これに關してヨセフスのユダヤ古事記四・八・二四には詳細な規定が見える。それによれば、
不孝子に對して最初一度はその非を言々誠めて、今後改心して従順なるべきことを勧めるが、しか
し、それで一向きゝめがなく從來と相變らず親に對して亂藉を振ふに於ては、親は容赦なくこれを
裁判にかけて郊外でこれを磔殺しなくてはならぬといふのである。

舊約聖書の各處(註)とヨセフスの書に父母を罵倒し或は毆打するが如き不孝ものは死刑に處せられる

と記載されてゐるが、「ベンシラーの智慧」及び其の他の舊約外典俗典に於てはどうか。これらの外典俗典には不孝子の罰則が不可思議な程に見當らないのである。例へば「ベンシラーの智慧」に於ては再三孝道に觸れてゐるにも拘らず不孝子に對しては如何なる處置を取るのか且體案を示さないのである。しかしこれは獨り孝道問題に限つたことではなく、一體に「ベンシラーの智慧」等に於ては種々のことについて教訓を與へてゐるが、罰則は記さないのが通例になつてゐる。

不孝子に對する罰則としては前記の申命記とヨセフスの書に比較的に詳細に記されてゐるのみでその外に於ては不孝の犯罪なることは言ふてゐるも不孝子に對する一般的懲懲については詳にされてゐない。申命記の規定とヨセフスの記載とはその年代に於て約七百年の隔りはあるが、その規定の内容は概して同調である。不孝子を處罰せんとする親は裁判に告訴するのであり、そこで處罰宣告が與へられたるときは群衆が石をもつて打ち殺すといふのである。ただヨセフスには子に不孝行為があつても最初の一度はこれを寛大に見て赦して今後を戒め、それでも尙ほ改心の跡を見せず依然親に横暴を爲するときは愈々法規による處罰を取るといふのであるが、斯様なことは申命記の規定にはない。

支那では唐律に不孝を稱して曰く「謂告言詛罵祖父母父母、及祖父母父母在、別籍異財、若供養有關、居父母喪、身自嫁娶、若作樂、釋服從吉、聞祖父母父母喪、匿不舉哀、詐稱祖父母父母死」

といつてゐるが、勿論これは不孝の例を一部分擧げたのみであつて、これ以外のことは不孝にならぬといふ譯のものではない。ヘブライ人は親に不順なるものを不孝とするのであるが、父母を毆罵するが如きは只だその一例に過ぎない。支那人の如き祖先崇拜の民に於てはヘブライ人とは違つて祖先の喪禮祭祀を怠ることは不孝とされ、また「其妻無子而不娶妾斯則自絶無以血食祖父請科不孝之罪」後魏書太武五王列傳九朝律考下卷十六引とあるのを見ると妾を娶らないことも不孝罪を構成する場合があつたやうである。これは不孝の觀念に相異がある譯ではなく、各民族の個々の習慣の相違によるものである。

裁判については後にも述べるであらうが、町の城門のところで長老が裁判するといふのであるがこれは普通の裁判形式であつて何等の不可思議のないところである。不孝は所謂親告罪であつて、關係者がこれを告訴しなければ處罰されなかつたやうに見える。但し、その刑として群衆の手による磔殺が採用されてゐるが、これについて暫時一考を費す必要があるやうに思はれる。

バレスチナは山地であつて到るところに石を見ざるところはない。古代文明國中に於てもバレスチナは山と石の多い點では著名な方である。百姓が田地から石を拾ひ集めるのは一つの役務になつてゐるのである。敵地に入つて田地に石を播き散して敵人をいぢめることさへあつた。⁽³⁾石は土地の肥沃とは相容れないが、これが手近に澤山ある以上人々がその利用法を工夫するのも當り前である。重り、利器、臼、界標、偶像、神壇、紙、その他、墓、井、家、城などの建築、及びその他種

々な方面に石が使用されたのである。石は人間の破壊力を増進させる道具として世界各地に於て採用され、武器として重大な役割を演じたものであるが、ヘブライ人に於ては殊更に然うであつた。暴力を振ふときに石でなぐりつけ、または石を投げつけたりすることは直ぐ豫想されるところであるが、軍器としても石が使用されたのである。古代の多くの民族に於て投石(*Slings*)が戦争の攻撃防禦に常用されたのであるが、ヘブライ民族に於ては殊に投石が盛んであつたのである。投石の用具及その方法については参照すべき明細な記載がない爲めに詳細なことは分らないが、アッシリアの彫刻に投石をやつてゐる人像があり、それらから推察するとヘブライ人の投石も概ねこれに似寄つたものであらうと考へられる。革製の索に石を置くところを附け、それに滑な石をはめて振りまはして投げたやうである。投石用の石を袋などに入れて之を持ちまはつたといふのを見ると、その石は大して大くはなかつたやうである。サムエル前書二五の二九には、人々の生命は投げ石の如く神様の袋の中にあり、神様はその好まざるものの生命は投げ石の如く袋から取り出して棄るといふ譬がある。戦争の軍備として楯、戈、鎧、弓などと共に投げ石を準備するのであり、投石の的中すること一寸分の違ひもないといふことは精兵の象徴であり、投石の上手なることは武勇傳の飾り種となつてゐるのである。包圍軍が攻城に投石の戦法を取つてゐるものもあるが、また、投石は高いところにあつて下の方へ向つて打ち投る方がもつと有効であつたであらう。歴代志略下二六の一五

には戦争に機械で大な石を打ち出して非常な効果を収めたといふ話があるが、これは恐らく後世に於る外國傳來のものであらうと考へられる。またヨセフスの著書にも攻城に石弩を用ひてゐる話が出てゐる。それに依れば白い石を射出するときには砲石の飛來するのが見えるから之を避けることが出来たが、黒い石を打ち出すと見わけがつかなくなつたため幾分損害を蒙つたとある。何れにしても大して恐る程の機械ではなかつたやうである。

同じく死刑にしても、そこには色々異つた執刑の方法がある。古代ヘブライ民族に於ても、磔殺、斬殺、絞殺、獸殺等の死刑が行はれたのであるが、就中、磔刑はヘブライ民族の代表的な死刑であつて、他の民族にはあまり多く其の例を見ることが出来ないものである。河川地方たるバビロニアに於て溺殺が代表的死刑とされ、山地のバレスチナに於ては磔刑が普通であつたのは面白い對照である。磔刑のことは舊約聖書、舊約外典俗典、ヨセフス、新約聖書等到處にに記載されてゐるが、今便宜上舊約聖書中の磔刑關係の記載項目を列挙してみやう。

出埃及記八の二六 (邪宗)

同 一七の四(?) (水渴の民衆とモーセの経緯)

同 一九の一 (神境のタブーを犯す者)

同 二一の二八―三二 (人殺しの牛)

レビ記二〇の二 (モロク崇拜者)

同 二〇の二七 (憑鬼者ト筮者)

同 二四の一〇—二四 (不敬)

民數紀略一五の三二—六 (安息日を守らざる者)

申命記二三の一一 (邪宗)

同 一七の五—七 (惡事を行へる者)

同 一一の二一 (不孝)

同 一二の二一 (未婚時代に不品行なりし婦)

同 一二の二四 (不倫の男女)

ヨシユア書七の二五 (アカン及び其の家族)

サムエル前書三〇の六 (慌廢の民とダビデの經緯)(?)

列王紀略上二一の一〇—三 (ナボテ)

歷代志略下二四の二一 (ゼカリヤ)(?)

エゼキエル書一六の四〇 (淫亂)

同 二三の四七 (淫亂)

以上示されたる以外の犯罪人も申命記一七章に記されてゐる如く磔刑に處せられるものがあつたであらうことは想像するに難くない。レビ記二〇章の不倫犯及び出埃及記三一章、三十五章の安息日犯の如きは石をもて撃ち殺すべしと明記するところはないが、前後の關係から見れば矢張り磔刑の部類に入れるべきものであらう。磔刑の風は後世まで續いたものと見え、俗典及び新約の中にこれに關する記載があるのみならず、ヨセフスのユダヤ古事記第十六編によればヘロデ王の時に三百名の官吏を一時に磔刑に處してゐるのである。不孝子に磔刑を科するといふのは單だ死刑を科することであつて、それ以外には特別の意味がなさうである。後世のユダヤ教徒の規定では、死刑には磔殺、焚殺、斬殺、絞殺の四つがあり、その中で磔刑が最も重く絞刑が最も軽いものとされてゐた。磔刑の方法にも一定の規定があつて、執刑には身長二倍丈の臺を置き、二人の證人の内一人が先づその死刑臺の上から死刑囚をつき落し、下にゐる證人は大きな石を死刑囚の胸に一度投げ付け、それで尚ほ生きてゐるときには觀衆がこれを磔殺するといふ。

裁判の様式も時代によつて相違があつたのであるが、申命記あたりに記されてゐる規定はヘブライ民族としては完備したる裁判の模様を示すものであつて、これを一通り紹介するのも必ずしも無益ではなからう。裁判所といふ特別の建物があつた譯ではなく、裁判は城門の中で行るのが普通であつた。ヘブライ人の都市はいづれも城を周圍にめぐらしたのであるが、その城壁が厚かつたので

あるから城門の下には可なりの空間があつた筈である。城門は交通便宜の要地であり、且つ附近には市場を控へてゐたのであるから、特別に裁判所のないところに於て城門で裁判を行ふのも怪むに足らぬ。裁判は王様、僧侶、長老等の支配階級が主として裁判官となつて行つたやうであるが、その中でも裁判官としては長老が重要な地位にあつたのである。今日の検事局に類するものがなかつた當時に於ては、告訴なきところに裁判なしで、告訴の要求があつて始めて裁判が成立する譯であつた。例へば不孝ものを法律の規定に従つて處罰しやうとする場合にはその親がこれを訴へ出なければならなかつたのである。死刑の如き重要な判決を下すには一人の證人の言では間違の虞があるから二人以上の證人が立證しなければならぬといふのであるが、これがいづこまで事實であるか多少疑問である。その他また、證人の資格には性と身分の差別があつた。女と奴隸には裁判に於る證人としての權利が許されてゐなかつたやうである。

ヘブライ人は流血を以て一つの穢れと思惟したのであり、城門のところで裁判を行ひ、且つ判決があれば直に刑の執行を取るのであるから、磔刑の如き死刑は城門外に於て之を執行するのが普通であつた。⁽³⁾いよく死刑囚を殺すのにも色々の順序があつた。先づ告訴人或は證人が之に手をつけ、然る後そこに集つてゐた群衆が皆手あたり次第に石を投げつけて之を殺すといふのである。兎も角死刑執行のときには彌次馬が大勢ゐて、皆これに手を出したものと見えて、ヨシユア記第七章

には磔刑の跡に石堆が出来たといふ誇張の記事が出来てゐる位である。死刑を執行するのに白刃一閃で萬事が済むのに、何の必要があつて全市民がこれに參與するなど大騒をしなくてはならなかつたのか。同じく殺されるにしても、獄中の一隅で有耶無耶に殺されるのと天下にはぢをさらし公衆の手によつて殺されるのとは、その殺されるものの苛責心に自ら相違がある。ヘブライ民族の間に見える公衆に手による磔刑は *Public condemnation* であつたか。斯くの如く解しないで、民衆の利害關係からこれを考へることも出来る。自分達の内部に社會の秩序を紊すものがある場合、その社會はそれがために害毒を蒙る譯であるから、先づ自分達の利害の爲めに罪人を皆共同して處罰して除拔するものなりといふ *Common interest* の見解を取るときは、申命記の死刑規定の記載の終り方に再三見える「汝かく惡事を汝らの中より除くべし」といふ文句が當然有利な楯となる譯である。しかし他方、これを支那の「梟首」や「棄市」と同じ性質のものに取り、群衆による磔刑は罪惡を犯したものの末路を民衆に見せしめ、將來をいさめる機會を作るものであつたといへないこともない。彼等の風習には殺された罪人の死屍を木や石垣等に態々かけて、之を公衆の眼にさらすことがあつた。⁽⁴⁾キリストの十字架は今更いふまでもない話である。第一に裁判を人の出入する城門で行ふといふのがそも／＼公示の意味を含んでゐるものである。アッシリアの法律に於ても死刑中の極刑として殺して木に張り付け之を埋葬に付しないことになつてゐた。斯様なことを考へるとただ一名の

罪人でも大勢のものが手を出して之を殺すといふのは民衆を警戒するためのやうに見えるが、しかし然うすると、民衆はただ見てゐるだけで済むのに何故に直接これに手を下して穢れの流血を敢てするのか、その理由が不可解になるのである。或はもつと原始的なもので公衆の忿怒の結果として發生した制度であるのか。何れにせよ、この問題については今にはかに判斷しかねる。

さて、子から侮辱を受けた親はその不孝子を殺す爲めに裁判に申し出たであらうか。歴史物語の中には律法書と違つて不孝子を死刑にしたといふやうな記載が見あたらない。偶然にしては餘りに度に過ぎる。ハムに對する呪詛の物語の外に、箴言第三十章中にも不孝子に對する呪詛が見えるのみである。これに關聯して、ヨセフスのユダヤ古事記第十六、十七編にあるヘロデ王に關する記載に注目しなくてはならぬ。西紀前九年頃ヘロデ王はアレキサンダーとアリストブルの二王子を死刑に處し、西紀前四年彼が死亡する四日前には長男アンチパテルも同様の運命に處罰したのである。しかし其の殺因には普通の親子關係よりもつと複雑なものがあつた。當時シリア、パレスチナはローマの勢力下にあつた時代で、殖民地氣分で、ローマの中央政府に奔走するなどして獵官運動が激しく、從つて上流社會の間にはデマ百出の軋轢の低氣壓が漂うて居り、且つヘロデ王家には内訌があつた。ヘロデがその子を殺した理由は單に親に對する扶養從順の義務を守らなかつたといふが如きものではなく、生きた自分を拂箱にして政權獲得の陰謀を企圖したといふにある。そうし

てその裁判といふのも非常なものでローマのカイゼルの認可を受け、小アジア、シリア邊から百何十名の多數の高官を會せしめて多數決によつて判決を下してゐるのであり、且つその死刑の方法も舊約に記されてゐるが如き、磔殺ではなく絞殺、斬殺の方法を取つてゐる。これは大なる利權をめぐつて起つた事件であつて、普通の親子關係とは區別して見らるべきものである。利害の關係の大なるところに於ては、普通なら簡単に済むべき親子の衝突も大なる悲慘を生ずるのである。尙ほこのヘロデ父子の骨肉相爭は當時すでに親子の情が非常に弛緩してゐた事實を間接に物語るものである。

ハンムラビ法典第一九五條に「子が父を毆打したるときは、その手を切り取らるべし」とあるがこれは毆打罪としては寧ろ重い方である。同法典に依れば、同じ身分の人を打つたときは罰金を取られるのであり、毆合で相手を負傷させたときはその醫療費を拂へばよいのであり、目上の人を毆打したときは笞刑六十に處せられるが、奴隸が自由民を毆打したときは重罰で耳を切り取られるといふのである。斯る事情を考へると父を毆打する不孝子に對する處罰として手を切り取るといふのは可なりの重罰であつたと見なければならぬ。尙ほ同第一六九條に依れば、親に不溫で手におへない子を仕様がなく除籍せんとする場合に於ても、親は最初の一度は子の過を赦してやり、それでも尙ほ不品行を重る場合はその子としての權利を總て剝奪するといふのである。また養子と養

親との間が不圓滿なときには解約することが出来るのであるが、單だ養子が娼婦の子であるか、或は技術家の養子である場合には養子たるものが我がまゝに破約して實家に歸ることが出来ないものである。ヘブライ時代の養子契約書に、

Tub-lalatu, son of Etel-bi-Shamash, (and) Belia, his wife, have adopted Habil-ahi as their son. House, field and all property that exist in the house, after Nin 1B-gumil, the elder brother, shall have, received his preference portion, they shall divide into equal parts. To the sonship document of Abum, the kaku-priest, the temple income, the field, the house and the garden of Habil-ahi, Nin 1B-gumil, his brother, shall make no claim. When Tub-badatu and Belia, his wife, say to Hab-l-ahi, their son: "Son not art thou," they shall pay half a mine of silver. But when Habil-ahi says to Tub-badatu and Belia: "Father not art thou, mother not art thou," they may mark him with the thumb-nail mark (?), put an unsalable slave's mark upon him or even sell him for money.

の如きものがある。これに依ると、養子たるものが養親に對して汝らはわが父母でないと罵倒し養子たるものの義務を怠る場合には、その養親はこれを奴隸に賣拂ふことが出来るといふのである。しかしこれと同じ時代の記録であるが、それに依ると養子が將來不孝破約の振舞をする場合には、

家から與へられたる財産を沒收され且つ若干の賠償金を取られるといふやうな約束であつて奴隸に賣り飛ばされるとは記されてゐない。⁽²⁾斯様な相違は最初契約を取り定めるときの事情如何によつて生じたるものであつて、皆一樣ではなかつた。何れにしてもベビロニアに於ては不孝子を死刑にするが如きことがなかつたことは明かである。親を毆打する子は手を切り取らるべしとあるヘブライ民法典の規定そのものも不孝子に對する極刑を示すものであつて、斯様なことが實際に社會に普通行はれてゐたとは考へ難いのである(スミメル法典三の四、五參照)。

一般文化が低級で法治制度の發達しなかつたところに於ては犯罪人に對して非常な嚴罰主義を取るものが普通であることは何人もよく知つてゐる事實で今更言ふまでもないことである。ヘブライ民族の間に於ても一寸目ぼしい罪は殆んど皆死刑に値するといふ。例へば夫なき寡婦、未婚の娘が男と交際してゐたことが發覺されれば死刑に處せられるといふのである。⁽³⁾古代の刑罰の苛酷を知つてゐる吾々は、斯様なことを悉く否定し去らうとはしない。しかしこれらの規定文がどれだけ事實を傳へるのか、そこには頗る疑しいところがある。親が不孝子を殺し得るといふも、自分の子に過失があるからとて之を殺す爲めに態々裁判に訴へるやうな人がゐたであらうか。親子の關係は愛着親密を現す最上級のものとされてゐるのである。神と人との不可離の關係も親子の親密に譬へられてゐる。不孝子死刑の記載はその極限刑を示すものであつて、斯様な實例はあまり無かつたものと見

て大過がなからう。(つゞく)

註

- 〔一〕 出埃及記二〇章にあるやうな十誡が申命記五章にもある。兩者を比較するに、十誡の内容及び順序は全然同一であるが、單だ字句の相異が多少ある。孝道についても申命記の方には、「汝の神エホバの汝に命じたまふごとく、汝の父母を敬へ、是れ汝の神エホバの汝に賜ふ地において汝の口の長からんため、汝に祥のあらんためなり」とあつて、「汝の神エホバの汝に命じたまふごとく」といふのと「汝に祥のあらんためなり」といふのは出埃及記の方の記載にはない文句である。
- 〔二〕 杉浦貞二郎博士の譯文に據る(世界聖典全集中の舊約外典 頁一二五)。
- 〔三〕 以上引用した以外に、レビ記一九の三、申命記二七の一六、箴言二〇の二〇、及びマタイ傳一五の四をも参照。
- 〔四〕 ハンムラビ法典第一六九條にこれと同様の規定が見える。
- 〔五〕 列王紀略下三の一九、二五、傳道之書三の五。
- 〔六〕 James Patrick, *Stone* (in Hastings, A Dictionary of the Bible, vol. IV, pp. 617-19)
- 〔七〕 出埃及記二の一八、民數紀略一四の一〇、サムエル後書一六の六、一三、列王紀略上一二の一八、歷代志略下一〇の一八、ベンシラーの智慧二二の二〇、同二七の二五、第二マカビ書一の二六、同四の四一、マコ傳一二の四。
- 〔八〕 I. Benjinger, *Hebräische Archäologie*, s. 300-1.
- 〔九〕 サムエル前書一七の四〇。
- 〔一〇〕 同 上。
- 〔一一〕 歷代志略下二六の一四、ヨセフスのユダヤ戰記三・七・二三。
- 〔一二〕 士師記二〇の一六、歷代志略上一二の二、ベンシラーの智慧四七の四。
- 〔一三〕 列王紀略三の二五、第一マカビ書六の五一。
- 〔一四〕 イウデト六の一二。ウイルキンソンのエジプト誌の挿繪には船の檣項に坐つて投石をやつてゐるのが見える。
- 〔一五〕 ユダヤ戰記三・七・二三及び五・六・三。

- 〔一六〕 メキシコのインデアン、アフガン人、古代アリアン人に磔刑の存在を見ることが出来るのであり、また古代アラビヤ人にも磔刑があつたが、但しアラビヤ人はユダヤ人の磔刑を模倣したものではないかといふ疑問がある。(Encyclopedia of Religion and Ethics, i. 153, 151, 159, ii. 50)その他ハヤンン灣のエスキモ人にも磔刑があるが(ウエスター著道德の起源卷一頁一七二)、しかし磔刑は世界遍在の制度ではなく極く特殊的な風習である。
- 〔一七〕 イウデリー書三〇及三三、ヨハネ傳八の五、七、同一〇の三一、使徒行傳七の五八等。
- 〔一八〕 Jewish Encyclopedia, iii. 556-7.
- 〔一九〕 裁判に關しては I. Benjinger, *Hebräische Archäologie*, s. 277-380 に簡明な記述がある。
- 〔二〇〕 申命記一七の六、同一九の一五、民數紀略三五の三〇。
- 〔二一〕 レビ記二四の一四、民數紀略一五の三六、申命記一七の五、列王紀略二一の二三、使徒行傳七の五七、ヘブル書二三の一二。
- 〔二二〕 レビ記二四の一四、申命記一三の九、同一七の七、ヨセフスのユダヤ古事記一六・一一・一二。
- 〔二三〕 民數紀略二五の四、申命記二二の二二、ヨシヤ書一〇の二六、サムエル前書三一の一〇、後書四の一二、同二二の一二、エズラ書六の一一。
- 〔二四〕 Arno Poebel, *Babylonian Legal and Business Documents from the Time of the first Dynasty of Babylon chiefly from Nippur*, pp. 27-34.
- 〔二五〕 創世記三八、申命記二二の二二。